

一九四〇年代における錢鍾書——文人・知識人諷刺のゆくえ

杉村 安幾子

1. 序

一九九八年十二月十九日、北京にて錢鍾書⁽¹⁾逝去。前月に八十八歳の誕生日を迎えたばかりであった彼は、中国において「文化崑崙⁽²⁾」とも「我々の国の貴重なる財産⁽³⁾」とも称された高名な学者兼作家であった。

年が明けて一九九九年。二月十二日に蕭乾が、同月二十八日に冰心が亡くなった。このたった二ヶ月ほどの間に中国文壇は、現代文学の礎でもあり支柱でもあった人物を次々と失ったことになる。二十世紀という百年間に中国が経てきた数多の過酷な運命を顧みれば、彼らの死は単なる「一作家・一文学者の死」と括られることを拒否するであろう。

錢鍾書の死後、彼及び彼の作品についての研究書が続々と出版された。九〇年代以降、彼に関する研究書は多く出版されていたのだが、彼の死を起点とした研究書刊行の大波には、追悼の意味合いもあったのだろう。又、専門的な文学研究書や知人友人による何種類もの追悼文集の他、二〇〇一年には十三巻本の《錢鍾書集》が生活・読書・新知三聯書店から、二〇〇三年には《宋詩紀事補正》全十二巻が遼寧人民出版社から出版されている。中国には錢鍾書を研究対象にする研究者が数多くおり、大学院の修士論文・博士論文で彼とその作品を扱う例も相当数あると聞く。錢鍾書研究が「錢学」と称されるようになったのは、無論、錢鍾書の業績に対する敬仰の念からであろうが、その背景にはこうした錢鍾書研究ブームもあったと思われる。

このような錢学の活況が、錢鍾書及びその作品を理解する際に大いに益となることは間違いない。しかし他方、それらの研究の幅或いは奥行きに一定の限界が存在することに不満を感じないではいられない。これは不満と言うよりは不安と言いつても可い。この不安とは、端的に言えば錢鍾書が文学創作の筆を断ったことへの言及の少なさに起因する。「創作の筆を断った」という表現には或いは語弊があろう。錢鍾書の旺盛な研究欲・学究心は様々な著書の形を取って結実しているからだ。しかし、文学者・作家としての錢鍾書を考える時、錢鍾書の文学創作の特徴や、文学史における位置などについての研究の他に、「作家であり続ける」という道を選択しなかった彼の思念の有りようについても当然考察すべきではないのだろうか。ここで謂う「作家」とは芸術製作者の中の小説家を指すものとする。

文学という営為は、それ自体形而上学的に人間存在を考えることにもつながる。一人の作家が何故筆を執り、又何故筆を断ったのかという問いは、究極の所本人にも答えの出せない問いであり得るし、他人が推し測る以上のことは出来ないのかもしれない。しかし、本稿において敢えてそれについての考察を試みるのは、早計の謗りを免れまいとも、それについて考えることが即ち錢鍾書と彼が生きた時代・社会を考えることに繋がると思われるからである。

2. 一九四〇年代における錢鍾書の活動——創作・研究・教育

まず、小説家・作家としての錢鍾書について考えるために、彼の創作面の活動を俯瞰しておく必要がある。以下、数種の伝記を基にして彼の足跡を辿り、創作活動の背景を探ってみたい。⁽⁴⁾

一九三八年秋、錢鍾書は妻楊絳とともに留学先のパリから帰国した。これは彼にとって、留学の志半ばにしての帰国だったと言って良い。と言うのは前年七月、盧溝橋事件を発端として抗日戦争が開始。主立った都市が次々と陥落して

いく中で、錢家一族も故郷を離れ上海租界に避難していたのだが、そのような情勢下、錢鍾書夫妻のみ呑気に外国で勉強を続ける訳にも行かなかったのである。帰国前、錢鍾書は哲学者であり当時母校清華大学文学学院院长であった馮友蘭から、錢鍾書を教授として招聘したいという申し出の書簡をパリで受け取っていた。これは当時においては破格の抜擢であった。外国留学から帰国したばかりの者を大学等の高等教育機関の教師にする場合、講師としてのみ雇う事が出来るというのが慣例であったのだ。その慣例を破ってまで当時弱冠二十八歳であった錢鍾書を教授として迎え入れたいという馮友蘭には、おそらく清華大学在学時の錢鍾書の非凡な才華が深く印象に残っていたからに違いない。錢鍾書はパリからの船が香港に着くと、その足で雲南省昆明に向かった。本来北京にあったはずの清華大学は、陥落した華北部から昆明に避難し、北京大学・南開大学とともに西南聯合大学を設立していた。錢鍾書はこの西南聯合大学外文系教師として迎え入れられた。当時、西南聯合大学の学生であった趙瑞蕻は錢鍾書を「最も若い教授であった」と回想している⁽⁵⁾。

新鋭の教授としてスタートを切った錢鍾書ではあったが、西南聯合大学には一年ほどしか籍を置かなかった。この間、彼は散文を発表している。聯大の教授達が主幹となって発行していた《今日評論》週刊に「冷屋隨筆」シリーズとして〈論文人〉、〈釈文盲〉、〈一個偏見〉、〈説笑〉を載せたのである⁽⁶⁾。これらの散文は短くはあるが、諷刺の利いた軽妙な筆致であった。彼は三九年夏には西南聯大を辞し、一旦家族のいる上海に赴き、秋には父錢基博が国文系主任を務める湖南省藍田の国立師範学院の外文系主任となった。又、この頃、詩文評《談芸錄》の執筆を始めている。

四一年夏、錢鍾書は夏期休暇を利用して家族のいる上海に帰ったが、十二月、日本軍による真珠灣攻撃から太平洋戦争が勃発。上海は日本軍占領下に落ち、錢鍾書も孤島上海に蟄居せざるを得なくなった。藍田に帰ることもかなわず、錢鍾書は職を失った形になったが、妻楊絳の父楊蔭杭が上海震旦女子文理学院での教職を譲ってくれたため、その仕事

によって糊口を凌ぐことになる。尤も家計が逼迫し凌ぎきれず、やむを得ず一時期家庭教師をしたこともあった。この震旦女子文理学院には抗日戦争終結まで勤めていた。この時期、錢鍾書は《談芸錄》をほぼ書き上げてはいたものの出版の見込みは立たず、改訂や推敲をすることしか出来ずにいた。

同年十二月、散文集《写在人生边上》が上海開明書店より「開明文学新刊」シリーズの一冊として刊行される。「人生は一部の大書だという。」⁽⁷⁾という一文で始まる〈序〉を付したこの散文集の収録作品は、〈魔鬼夜訪錢鍾書先生〉（魔物が夜、錢鍾書先生を訪ねる）、〈窗〉（窓）、〈論快樂〉（快樂を論ず）、〈説笑〉（笑いについて語る）、〈喫飯〉（食事について）、〈読伊索寓言〉（イソップ寓話を読む）、〈談教訓〉（教訓について談ず）、〈一個偏見〉（一つの偏見）、〈釈文盲〉（文盲について解釈する）、〈論文人〉（文人を論ず）の十篇であった。

この散文集は巻頭に「贈予季康（季康に送る）一九四一年六月二十日」という題辞が付されている。季康とは妻楊絳の本名である。更に題辞の次のページには〈誌謝（謝意を記す）〉があり、錢鍾書は次のように述べている。

この文集中の文章のうち、何篇かは既に発表をしたことのあるものである。かつて孫大雨、戴望舒、沈從文、孫毓棠の各先生が主編或いは計画なさっていた刊行物と関わりがあったのだ。

陳麟瑞、李健吾の両先生には全文を通して閲覽して頂き、並びに出版印刷方面において惜しみない援助を頂いた。作者は遠く内地より来たのであるが、上海の楊絳女士によってこの数篇の散文は整理され、選別され、編纂され、こうして一つの文集となったのである。

願わくばこの数名の方々が微力を厭わずに作者の感謝を受けてくれんことを。

〈序〉の末文には「一九三九、二、一八」との日付が見られる。錢鍾書は湖南藍田で教師を務めながらこれらの散文を書いたのであろう。そして、それが出版という形で日の目を見たことは、妻の尽力と友人の援助のお蔭であった。又、

謝辞の中に見られる「何篇かは既に発表をしたことのあるもの」とは、前述の西南聯大の教授達の手による《今日評論》に発表した四篇を指す。

この頃から翌四二年にかけて、錢鍾書は短篇小説の執筆をも始めている。⁽⁸⁾ 四三年には妻楊絳が戯曲を著し、それが公演され大好評を博し、一躍上海文壇の寵児となっている。妻の活躍に触発されて、錢鍾書が四四年に着手したのが長篇小説《圉城》の執筆であった。これにはほぼ丸二年の歳月を要している。⁽⁹⁾

四五年十月に友人傅雷が主編を務める雑誌《新語》第一期・二期に短篇小説《靈感》を発表。既に書き溜めてあった作品の一つを掲載させたのは、雑誌を創刊したばかりの友人への協力であった。抗日戦争終結後、翌四六年の初めには南京の国立中央図書館の編集委員となって雑誌の編集に携わる。一月には創刊されたばかりの雑誌《文芸復興》に短篇小説《猫》を発表。六月には短篇集《人・獣・鬼》が上海開明書店から「開明文学新刊」シリーズの一冊として出版される。この短篇集は雑誌に発表した《靈感》と《猫》に、《上帝的夢》と《紀念》を加えたものであった。四四年四月一日と四六年一月三日付けの《序》が付されている。

《文芸復興》には四六年二月より《圉城》の連載も始めている。連載は四七年一月まで続いた。錢鍾書の作品の中ではこの《圉城》が最も有名である。《文芸復興》という雑誌自体が当時の文学界において相当の影響力を有していたのであるが、錢鍾書《圉城》、巴金《寒夜》、李広田《引力》はその《文芸復興》の中でも最も読者の注目を集めた作品であった。⁽¹⁰⁾ 《序》の冒頭で、「この本において、私は現代中国のある部分の社会、ある種類の人間を書きたかった。」と述べられたこの長篇小説は、四七年六月に上海晨光出版公司から「晨光文学叢書」の八冊目として出版された。翌年九月には再版され、更にその翌年の四九年三月には第三版を重ねた。

錢鍾書は図書館の編集委員を務めながら、四六年九月には上海の国立暨南大学外文系の教授にもなり、外国文学及び

文学批評の授業を担当し、四九年五月まで勤めている。

その後も散文、書評、論文等を雑誌に発表し続けるが、錢鍾書は再び長篇小説の執筆に着手した。彼は《围城》にあまり満足していなかったのである。しかし、四九年夏に上海から北京へ引っ越す際に、この長篇《百合心》の原稿は失われてしまった。⁽¹¹⁾

同年十月、中華人民共和国成立。錢鍾書は再び母校清華大学外文系の教授となり、五二年に北京大学文学研究所（後の中国社会科学院文学研究所）外国文学研究班に異動になるまで勤めている。

建国後も錢鍾書の執筆活動は続くのであるが、彼の足跡についてはここで一旦筆を措くことにする。上記にまとめた錢鍾書の活動は、年代を追って見てはきたが、三十年代後半から四九年の人民共和国成立までの十年ほどのものである。この時期の活動のみに焦点を当てたのは、錢鍾書が小説創作を行なったのがこの十年の間だけだったからである。錢鍾書は次のように書いている。

（《百合心》の原稿を失ってしまったから）興趣がすっかり失せ、それきりずっと二度と奮起する事がなく、以来却って気楽になってしまった。年を一年一年重ねていくごとに、それに従って創作意欲も衰え、創作能力も次第に消失してしまった。（中略）私はゆっくりと気楽な状態から平静な状態へと入っていった。二度と小説を書くつもりはなかった。⁽¹²⁾

この文章が書かれたのは一九八〇年二月であるが、三十年間の月日を細かく顧みずとも、錢鍾書はその間もその後没するまでも小説は執筆しなかったのである。

3. 作品に見られる文人・知識人諷刺

前章で見たように、錢鍾書の作家としての活動は一九四〇年代に限られていた。具体的に刊行された作品を挙げてまとめれば、散文集《写在人生边上》（四一年）、短篇小说集《人・獸・鬼》（四六年）、長篇小説《围城》（四七年）ということになる。《写在人生边上》は散文集であり小説創作ではないが、創作色の濃いものとなっているため⁽¹³⁾この時期の創作の一環としてとらえることにする。又、《写在人生边上》と短篇集《人・獸・鬼》には内容面で一種の呼応関係になっていると指摘する研究もある⁽¹⁴⁾。

さて、これらの散文・短篇・長篇小説には共通して非常に大きなある特色が見られる。文人・知識人諷刺である。どのようにその諷刺がなされたか、以下に見ていこう。

散 文

最初に、散文の中から題名がそのものズバリ《論文人》を挙げる。

文人とは誉めるべき者だ。何故なら彼らは謙虚であるし、向上することを知っている。身分は持たず、本分には安んじない。そうなのだ、文人は自分のことを時には他人が彼に対するよりもずっと軽蔑しているのだ。彼は自分が文人であることを恨み、話・労力・時間・紙の無駄を惜しまないことで、自分は文人でありたくない、文人であるのに不満だということを証明している。

まず、文の調子からしてシニカルである。要は文人が「自分が文人であること」を過剰に意識して、それらを綴るた

めに労力や時間・紙の無駄に努めている様子を嘲笑しているのである。

文学は滅びなければならない。しかし、文人は奨励しても構わないだろう——彼らに文人にならないよう奨励するのだ。ポープ (Pope) は口にするところ皆立派な文章になった (Lips in numbers) し、白居易は生まれながらにして「之」と「無」の二字を知っていた (唐の白居易は生後七ヶ月で之・無の二字を覚えたという。《唐書・白居易伝》に見える故事。…杉村注)。こうした救いようのない先天的な文人は畢竟少数なのだ。普通の文人について言えば、実の所、文学も別に好きではないし、別に長けてもいないのだ。(中略)

要するに、我々は文学を滅ぼし、文人を奨励すべきである——彼らに文人にならないよう、文学をしないように奨励するのだ。

ポープや白居易を「救いようのない先天的文人」と言っているが、これは裏を返せば、そのような高次の文人以外は、文学好きでも文学創作に長けている訳でもないのだから「文人」の資格などないと述べているということであろう。或いは文人には文学を語れないという些か極論めいた規定かもしれない。

更に〈釈文盲〉では次のように述べている。

例えば三年前の秋であるが、偶々ハルトマンの大著『倫理学』をパラパラ見ていて、面白い一節を見付けた。簡単に言うと、ある種の人達は事の良し悪しがわからず、善悪の判別がつかない、まるで色盲の患者が青と赤や黒白の区別がつかないようなもので、これは価値盲の病気に罹っていると言えるのだという。(中略)

価値盲の一種の象徴は美的感覚が欠落しているということである。文芸作品に対して、まるで鑑賞能力がないのだ。こうした病症は、我々は色盲の例に基づいて文盲と言い換えてしまっても差し支えなからう。

中国でも非識字者を「文盲」と称するが、錢鍾書の嘲笑の矛先は、物事の良し悪しの弁別の付かない者に向けられて

おり、彼はそうした人々を「文盲」と名付けて笑っているのである。だからと言って、彼は無知を笑っているのではない。例えば本当に文字を知らない者については、文学を鑑賞する能力の有無を問うても無駄であろう。錢鍾書は、自分に能力があると思ひ込んでいる無能者を笑っているのである。そうした修復不能な滑稽な思ひ込みを「病症」と称しているのは、それゆえである。

上の二篇の散文は、錢鍾書が西南聯合大学に勤めていた時に学内雑誌に発表されたものである。それを考えるとこの二文が何やら意味深長に思えてくる。学内雑誌に発表された文を読むのは、当然学内の者が中心である。個人攻撃ではなく、あくまで一般化して述べられていたとしても、その諷刺の毒を或いは同僚の教師達は感じ取ったかもしれない。もしそうだとすると、当時まだ二十代であった錢鍾書の筆致を倣岸不遜なものだと見なす者は少なくなかっただろう。それが原因であったかどうか、錢鍾書が西南聯大を辞し藍田の国立師範学院に移る背景には彼と同僚教師達の関係の悪さもあったようである。⁽¹⁵⁾

短篇小説

短篇小説からは〈猫〉と〈靈感〉を取り上げて見てみよう。〈猫〉は若い夫婦が主人公であるが、それ以外に八人の知識人が描かれており、皆一様に著名なインテリゲンチヤとして登場するのだが、彼らは例えば以下のように紹介されている。

背が高く、大声で話しているのは馬用中といって有名な政治評論家であり、毎日『正論報』に社説を発表している。国際的に、或いは国内で何か政治変動が起きると、彼は事の後に、いつもそれがまさに彼の想像していた通りであっ

たか、或いは彼がかつて暗示的に預言していたのだと証明できるのであった。(中略)

洋装で禿げ頭なのは何とか學術機関の主任趙玉山である。この機関では多くの大学卒業生を雇ってひどく詳細な研究報告を編集している。その最も有名な一つが『印刷技術發明以来の中国の刊行物における誤字統計』であり、これこそが趙玉山の定めたテーマであった。何でもこのテーマは一生かかっても成し遂げられるものではなく、學術研究における耐久精神を養うには最も良いものだろう。彼はよくこのように揚言している。「誤字を一つ発見する価値というのは、コロンブスの新大陸発見に劣るものではありませんよ。」⁽¹⁶⁾

カリカチュアを見ているかのような辛辣な紹介文である。他の人物に対しても諷刺の辛辣さは同様であり、〈猫〉においては、登場人物の全てが諷刺の対象と言い得るほどである。当時、新聞に社説を書いたり、學術機関の主任を務めるなどした者は大抵は大学卒であり、外国留学の経験もあるといった新式の教育を受けたエリート的存在である。一方、錢鍾書は〈猫〉において旧式の知識人について次のようにも描いている。主人公である若夫婦のうち、妻愛默の父親についての描写である。彼は清朝の遺臣で旧式の思想の持ち主であり、世が民国になってしまったことを恨んでいる人物であった。

彼は次第に異郷に寓居している大官である自分にも金儲けの道があることを悟った。今日成り上がり者が息子の結婚を執り行うには婚礼の立会人が必要になり、明日外国商社の買弁が母親を亡くせば「主」の字を書かねばならず(旧時の習俗で人が死ぬと遺族は木の位牌を作り、位牌に神主の二字を書くが、「主」の字の上の点はわざと書かずにおき、出棺の前に日を選んで名望家に朱筆でその「主」となっている字に点を付けて「主」の字にしてもらうこと…杉村注)、そのどちらにも清朝の遺老が役に立つ。謝礼はいつも、月々に要する額に相当するほどであった。丁度うまい具合に、買弁の母親は死に続け、成金の息子は皆大きくなった。彼の書く文章は平凡だし、字も特に優

れている訳ではない。しかし、彼はいくつか自分の官職印の「某年進士」とか「某省布政使」などを押しさえすれば、自分の字と文章が、他人がすぐ大枚をはたいて欲しがるような物になると気付いた。彼は清朝の滅亡には代価があり、遺臣は一仕事をするにふさわしいのだとやっと気付き、そこで心が落ち着いたので、進んで娘を西洋式の学校に入れ勉強させたのだった。

「某年進士」とある事からわかる通り、この父親は科挙に合格して清朝で官僚になっていたという、当時における典型的な旧式知識人である。身分を保証してくれていた清朝に恋々としながらも、彼がかつての自分の身分を利用し、特に素晴らしい訳でもない字と文章で金を儲けるようになった様が描かれているのだが、これとてもカリキュアライズされた人間描写と言えよう。興味深いのは、彼が自分のような人物の再生産を行なうのではなく、自尊心を満足させた後には、自分の子供には時宜にかなった欧米式の新しい教育を受けさせている点である。

このように錢鍾書は新旧双方の知識人を諷刺の対象にしている。錢鍾書自身はイギリスとフランスに留学経験がある新式知識人だが、無錫の錢家は読書人の家系であり、多くの科挙合格者つまり旧式の知識人を輩出している。当時、こうした旧式知識人は錢鍾書の身近に散見されたことは間違いない。

更に〈靈感〉も見てみよう。この作品の主人公はある作家なのだが、彼には作品中で名前が与えられていない。

あまりにも名望のある作家なものだから、私達は却って彼の名が何であったかわからないのである。それは別に彼にまだ名がない（原文…未名）とか、名を捨ててしまった（原文…廃名）とか、名無しさん（原文…無名氏）であるとか、或いは訳がわからない奴（原文…莫名奇妙）であるからというのとは違う。その訳は簡単だ。彼の声望が非常に大きく鳴り響き、私達を揺るがしているために彼の名がはっきり聞き取れなくなっているからなのだ。

ここで錢鍾書が「未名」、「廃名」、「無名氏」、「莫名奇妙」の四つを並べているのは、無論「名」という語を用いた一

種の駄洒落であろうが、事は単なる駄洒落には止まらない。まず「未名」だが、この語を挙げれば、おそらく当時の知識人の誰もが、魯迅を中心とする青年文学者達が一九二八年に北京で創刊した雑誌《未名》を思い浮かべるであろう。又、「廃名」とは二・三十年代に活躍していた、個性的な作風と独特な作品世界で知られる作家馮文炳の筆名である。後に唐弢が、四十年代に風格が突出した作家として錢鍾書と並べてその名を紹介している。⁽¹⁷⁾「無名氏」も同様に作家の筆名であり、本名は卜乃夫、四十年代に恋愛小説を執筆し一世を風靡した。四十年代に名を知られ、後に鳴りをひそめた作家として徐訏、張愛玲と並べて錢鍾書、無名氏を挙げる者もいる。⁽¹⁸⁾「莫名奇妙」は、この語を筆名にした作家などはいないようだが、他の三つの語の裏には、これらの語が喚起する作家のイメージを計算して用いている錢鍾書の姿があることは間違いない。「彼の名前が知られていないのは、まだ名がないとか、名を捨ててしまったとか、名無しさんだからではない」という表向きの文意の蔭に、当時誰もが知っていたであろう有名作家の名を想起させ、読者をにやりとさせようという狙いであったのだろう。

《靈感》の主人公たるこの名のない作家は、多作の天才型であった。数え切れないほど多くの小説・戯曲・散文・詩歌を書いた。多作ゆえに彼の作品は到る所で読む事が出来、その結果彼は国家の定めた「天才作家」になる。そして、ノーベル文学賞の候補となるのだが、惜しくも選外となってしまう、彼は怒りと失望のあまり病氣になり死んでしまう。作家の魂は地獄に落ち、新たに生まれ変わるために閻魔大王による裁定を待つ。以下の引用は作家と閻魔大王のやり取りである。

「それなら、私を何にして世に出すつもりなんです？」

「それをまだ考えているところじゃ。お前は前世で大量の墨を消費した。普通ならお前が次に生まれる時にはイカにして墨を吐かせるべきなんじゃ。しかしお前はたくさんの紙も無駄にした。お前は羊に生まれ変わって、羊皮紙

の原料を供給すべきじゃな。お前は勿論のこと、創作生活で筆先も数え切れなほど駄目にしている。それならお前は兎か、鼠か、或いはやっぱり羊にすべきかのう。(後略)」

この閻魔大王の台詞はまだしばらく続く。作家が創作の際に用いて無駄にしたペン先のことまで持ち出し、ペン先の原料である金属に生まれ変わらせる云々と喋り続けるのである。この作品は一読して錢鍾書のノーベル文学賞を欲しがる作家への諷刺を感じ取れるが、更に同時代作家の独創性のなさを諷刺したものであるとする見解もある。⁽¹⁹⁾作家に名前を与えておらず、大作家で多くの作品を世に出したということ以外わからないため、錢鍾書が具体的な誰かを念頭に描いていたとは考えられないが、逆に言えば当時の「大作家」全てに向けて諷刺の矢を放っていたとも考えられる。錢鍾書は閻魔大王の口を通して、作家が生命の籠っていない作品を生み出しても、それは所詮紙や時間の無駄に過ぎず、結局虚言妄言を弄していると暗に言っているのではないだろうか。してみると、錢鍾書の「作家」や「創作活動」に対する考え方は突出して厳しいものであったと言える。

長篇小説

錢鍾書の長篇小説《圉城》は「新儒林外史」と呼ばれている。⁽²⁰⁾清代の章回小説《儒林外史》は読書人や官界の腐敗を鋭く諷刺・批判した、ユーモアに満ちた作品とされているが、《圉城》はそのニュー・バージョンという訳である。「新儒林外史」という別号を冠せられたということからもわかるように、《圉城》の登場人物はその殆どが知識人階級に属している。

この作品は主人公の青年方鴻漸が留学を終えて、欧州から中国へ帰国するところから始まる。方鴻漸は留学していた

四年間のうちに三度も大学を換え、挙句に架空の大学の博士学位証明書を捏造した。帰国して名士の父親をそれで騙そうという魂胆である。彼は各地で恋の鞘当てを繰り返して、内陸の大学に教師として赴任するが、恋愛・仕事・結婚に希望を持ちながらもその全てに失敗する。「囲城」という語が、人生の諸事を取り囲む堅牢な城壁を象徴するものとしてこの作品のタイトルになっている所以である。⁽²¹⁾

《囲城》に登場する大勢の知識人のうち、まず主人公方鴻漸は万事いいかげんなお調子者だが、悪人ではない。偽の学位記も自分の父親や、生活の面倒を見てくれた婚約者（故人）の父親をごまかすために作ったものであり、その後学位を話題にされる度に良心が疼き恥ずかしい思いをしている。ところが、偽学位を平然と自慢する輩もいる。方鴻漸が就職した大学の同僚で、歴史系主任の韓学愈である。

「どうしてそちらの系主任はお給料が特に高いのですか？」

「それはですね、主任は博士、Ph.Dだからですよ。私はアメリカには行ったことがないので主任が卒業した大学については聞いた事がないんですが、何でも有名な大学で、ニューヨークの何とかコロリントン大学とか言うらしいんですよ。」

鴻漸はびっくりして飛び上がった。まるで自分の隠し事を暴き出されたかのようで、思わず叫んでしまった。「何大学ですって？」⁽²²⁾

方鴻漸がびっくり仰天したのも当然のこと、彼自身が偽学位を得たのも架空の「コロリントン大学」だったからである。尤も、方鴻漸は就職の際には、履歴書において微塵もその件については触れず、経歴詐称は行なわなかった。ところが韓学愈は堂々とその偽の学位でもって系主任の座についているのだ。彼の凄い所はそればかりではない。

高松年学長は昆明で初めて韓学愈に会った時、この男は誠実そうで物静かな、まるで君子のようだと感じた。しか

もまだ年でもないのに若禿げなのは、脳の中の学問が多過ぎて溢れ出てきてしまい、頭髮を全て押し出してしまったからだろう。しかも彼が作成した学歴に、博士の学位以外に「著作はアメリカの『ジャーナル・オブ・ヒストリー 史学雑誌』、『サタデー・レビュー 土曜文学評論』等の有名刊行物中に散見される。」という一項もあるのを見て、改めて彼を高く評価したのだった。(中略) 韓学愈も確かにそれらの雑誌に投稿した事がある。しかし高松年学長は知らなかった。彼の作品は『土曜文学評論』の人事広告欄に「当方中国人青年、高等教育を受く、中国問題を研究する方の助手を致したし、謝金低廉。」「史学雑誌」の通信欄に「韓学愈氏、二十年前の本誌を求む、お譲り下さる方連絡乞う、某所で相談致したし。」と発表されたのだ。

更に韓学愈は白系ロシア人の妻をアメリカ人と偽って、外語系の教授にするよう画策してもいた。一見寡黙で君子然とした歴史系主任の実態はこのようなものであった。方鴻漸の大学の同僚教師達において、この韓学愈はとりたてて特別という訳ではない。例えば方鴻漸と大学まで同行した中文系の李梅亭は、大学に向かうまでの旅の間、娼婦やバスで同乗した若後家に色目を使ったり、輸入菓をしこたま抱え込んで大学で売りつけるつもりでいるという男である。又、方鴻漸が就職する前に食事会の席で会った哲学者褚慎明は、世界的に著名なバートランド・ラッセルを愛称で呼び、いかにも親しい交際があるかのように振る舞い、周囲の人々に対し自分が大人物であるかに装っていたが、実は何の関係もないのだった。このように《困城》に登場する知識人達は、俗物でなければ、愚鈍か狡猾であるという具合である。特に方鴻漸が就職した大学は、派閥争いや醜い嫉妬の渦巻く、インチキ知識分子や利己主義者達の巢窟でしかなかった。《困城》で諷刺的に描かれていないのは、方鴻漸が想いを寄せつつも手ひどく振られる女性唐曉芙一人のみである。²³

錢鍾書の作品群に見られる文人・知識人諷刺を見てきたが、上に挙げた例はほんの一部に過ぎない。それは逆に言えば、いかに彼の文人・知識人諷刺が多くなされているかということである。夏志清は錢鍾書の小説の二大特色を知識分

子諷刺と心理描写と見なしているが、その特色は散文・随筆にも及んでいるのである。⁽²⁴⁾

錢鍾書の小説中の人物については、個別に見ていくとそれぞれモデルがある。ここでは紹介の煩を避けるが、それらのモデル達は錢鍾書の同僚であった者や周囲にいた者であることが多い。しかし、それはあくまでモデルに過ぎず、具体的個人攻撃の意図はなかっただろうと思われる。自らの作品中でこれだけ文人・知識人諷刺を行なっていれば、単なる個人攻撃や個人批判ではなく、やはり広く文人・知識人一般を諷刺・批判しているのだと見て間違いない。では、錢鍾書は何故このように繰り返し文人・知識人を諷刺したのであるのか？ 錢鍾書自身が知識人の典型であったにも関わらず、知識人諷刺に固執したとすら言える、その理由はどこにあったのだろうか？

4. 建国後の錢鍾書——大学者の道

一九四九年中華人民共和国成立後の錢鍾書の活動を追っていこう。

建国後、錢鍾書が北京に居を移し、母校清華大学外文系の教授に任ぜられ、五二年まで勤め、中国社会科学院文学研究所に異動になったところまでは²で見た。その間、《毛沢東選集》の英訳委員会主任をも務めている。しばらくはその英訳の仕事に専心し、自分の評論等の執筆や発表からは離れていたが、五六年から文学研究所所長であった鄭振鐸から《宋詩選注》編纂の任務を命ぜられ、五八年九月に同書を人民文学出版社より刊行している。《宋詩選注》は、古典文学を整理し叢書として出版することを目的とした研究プロジェクトの一環であった。

六〇年代は《毛沢東詩詞》英訳グループに参加しつつ、論文を発表していた。しかし六六年、文化大革命開始。夏には錢鍾書も批判の対象になり、六九年には河南省の五七幹部学校に下放した。文革期及びこの五七幹部学校での事は、

後に妻楊絳が《幹校六記》（香港広角鏡出版社・北京三聯書店 一九八一年）という書物に著している。

七二年、錢鍾書は楊絳と共に北京に帰り、文学研究所内の一室で仮住まいを始める。仮住まいは七六年の文革終結まで続いた。この頃、暇を見て《管錐編》の執筆に取りかかる。七九年には中国社会科学院の代表団として渡仏、パリを訪問。更に訪米し、イエール大学・コロンビア大学・カリフォルニア大学バークレー校を訪問した。又、同年八月から十月にかけて、《管錐編》全四巻が中華書局より刊行された。これは、一五〇〇ページを超える札記の形を採った古籍研究の大論著である。古籍を通読しつつ、ギリシャ・ラテンをも含む古今東西の書物を縦横無尽に引用する様は「人間業とは思えぬ博覧強記・博学多識⁽²⁵⁾」とすら評された。更に九月には論文集《旧文四篇》が上海古籍出版社から出版された。

八〇年十一月、訪日。京都大学・早稲田大学等を訪れ、座談会や講演会に参加。日本からの帰国以後、出国することはなかった。同時期、《围城》が人民文学出版社より重版され、瞬く間にベストセラーとなった。四七年の初版から三十余年、その間左翼文学一辺倒の強権的な文芸政策によって文学史から排斥され、人々に忘れ去られた感のあった《围城》であるが、この重版によって作家錢鍾書の名は、再度文学青年達の話題の中心となったのである。八二年には中国社会科学院副院長に。評論・論文を雑誌に発表し、八五年に評論集《七綴集》を上海古籍出版社より出版。八九年には、テレビドラマ《围城》の撮影が始まり、九〇年に中央電視台で放送された。黄蜀芹が演出を努めたこのテレビドラマは、中国国内において大きな反響を呼び、《围城》重版に端を発する錢鍾書ブームをより盛り上げる結果となった。このブームは、単に《围城》人気によるものばかりではなく、国内外で多くの研究者を生むまでに至り、錢鍾書はアメリカのプリンストン・コロンビア・オハイオ州立の各大学から招聘を受けたが、そのどれをも断っている。

九三年春、錢鍾書は左の腎臓の切除手術を受けた。この手術は成功ではあったが、既に八十の齢を越えていた彼は、退院後十一月には中国社会科学院副院長を辞職。名誉職である特別顧問になった。翌年夏、再度入院。それから亡くな

るまでの四年間を病院のベッドで過ごす事になる。その間、九五年には詩集《槐聚詩存》を生活・読書・新知三聯書店から、九六年には清末の文人陳衍について記録した《石語》を中国社会科学出版社から刊行。又、九七年春には一人娘である錢瑗を癌で失った。愛娘に先立たれたことは、錢鍾書にとって非常な打撃となり、九八年十一月に八十八歳の誕生日を迎えてほどなくして高熱を発し、十二月十九日午前七時三十分、この世に別れを告げたのだった。

こうして、建国後の錢鍾書を一通り通覧してみたが、錢鍾書の生涯は大学者のそれと言うより他ない。大学や研究所というアカデミーに勤務し、著した書物も学術性の高いものが殆どである。錢鍾書が大学や留学先で修めたのは外国文学であるが、彼は中国の古典文学にも通曉しており、その知識と教養の結実である《談芸錄》と《管錐編》は、まさに読者を圧倒せんばかりの博覧強記の具現とも言えよう。つまり、彼は学者という文人・知識人の典型である道を邁進したのである。ここで、3. の最後に発した問いが改めて意味を持ってくる。錢鍾書は自らが大学者であったにも関わらず、文人・知識人を諷刺や嘲笑の対象にしたのは何故であるのか？そして又、四〇年代以降、創作の筆を断ったのは何故であるのか？

5. 結び——エクリチュールへの固執或いは抵抗の表明

二〇〇一年に《錢鍾書集》全十三巻が刊行されたことは既に述べた。中国のこれまでの出版事情を見てくると、今後錢鍾書の全集の刊行計画が出されることは間違いないだろう。全集が実際に刊行の運びとなるかについては、《錢鍾書集》が出たばかりでもあり、まだ推測の域を出ないものであるが、刊行されていない欧文の論文や、書簡や日記なども含めると相当な量の筆記を錢鍾書が遺したことは容易に想像がつく。それらのまだ読者の目に触れていない筆記の存在

を指摘するまでもなく、《管錘編》一つを取っても、それは彼が建国以後小説創作の筆を断つても尚エクリチュールに執着し続けた証左となろう。《管錘編》は三聯書店版《錢鍾書集》のほぼ半分の量を占めるほどの大部な書なのである。上で見てきたように、錢鍾書は現代中国における大学者であった。そして、その彼が四〇年代にのみ小説創作を行い、それ以降は小説創作を行なわなかったことは、ただ単に彼自身が言うように《百合心》の原稿を紛失してから創作への興趣・意欲を失ったからだけではないと思われる。本人の言うような側面を否定しているのではない。しかし、本人の意図せざる面、或いは自己の思念をエクリチュールとして残す訳にはいかない面もあったのではないか。その一つは時代的側面、十年に及んだ文化大革命である。建国後の中国において、文芸界は左翼文学が主流を占め、それが「望まれる文学」ではなく「あるべき文学、あらねばならぬ文学」として他を圧していたことは衆知の通りである。時としてその文芸路線は他の文学の存在を拒否し、抑圧し、激しく排斥した。その極端な例が文革である。その嵐の中で非難され、作品に対する批判ばかりか、人格攻撃まで受け、心身ともに打撃を蒙った文学者は少なくない。紅衛兵の非道な迫害に耐えかねて、自殺にまで追い込まれた老舍等の例もある。「創作が死を招く」という表現が些かの誇張でなく現前した時代に、文学への興趣・意欲を有し続けることは不可能に近いだろう。錢鍾書も文化大革命期を文学の死せる時代と感じたのかもしれない。今ここで文革という災厄の原因を毛沢東一人或いは四人組等に帰結させても意味はないだろう。又、どんな国家・時代にも絶対的自由などというものは存在し得ないであろうが、文学的営為ばかりでなく人間の尊厳すら侵され、自らの言動が招くかもしれない結果に怯えねばならないという非人間的な時代であった文革期に、中国文学の存在や意義それ自体に懐疑的になった者がいても当然である。錢鍾書が小説創作の筆を断った蔭には、文学という本来人間の自然な感情から発せられて形となるものにまで「路線」の敷かれるような明らかに不自然且つ誤った状況への反発があったかもしれない。少なくとも錢鍾書が「小説創作への興趣・意欲を失った」と《圍城》〈重印前記〉に書

いた一九八〇年は、文革終結の一九七六年からさして年月を経ていない頃であり、彼がいくら身の自由を取り戻していたとは言え、自らの発言に相当慎重になっていたことは確実である。〈重印前記〉はさりと書かれてはいるが、人民共和国成立後に始まり、結局亡くなるまで続いた錢鍾書の小説創作断筆の宣言であり、同時にそこまで追い込まれた文学者の一種の抵抗であったように思う。錢鍾書の字は「默存」^{あざな}。その字の示す通り、彼は黙すしかなかったのだ。

そして、文革終結から二十年、錢鍾書は自らが嘲笑・諷刺の対象とした文人の道をひたすら黙々と歩き続けた。「文化崑崙」とまで称された知的巨人たる彼のそうした姿は、恬淡としているようでもあるが、書くこと——エクリチュールに固執する、否、固執し続けざるを得ない中国現代知識人の自己確認の有りようではなかっただろうか。書けば書くほどに、学者としての名声が増すほどに、嘗て自分が作品中で放った嘲笑・諷刺の矢は自分に返ってくる。それも辛辣な毒をより多く含んで。そう考えると、彼の四〇年代の小説創作はあたかも全て自嘲の繰言であるかのようなのだ。しかし又一方で、錢鍾書が小説において文人・知識人諷刺を繰り返したのは、書くこと以外に能力のない（或いはする事のない）、虚飾にまみれて幼稚な俗物でしかない、自分を含めた文人・知識人に限りない共感と同情を覚えていたからかもしれないとも思われる。知識人は所詮知識人たることをやめることが出来ない。四〇年代に自らを諷刺し、嘲笑し続けた彼の姿勢とは、倨傲とも受け取られかねない冷徹且つ辛辣な諷刺と表裏一体の関係にあった、アイデンティティに対する了悟或いは諦念とも言い得るものなのだろう。

建国後、錢鍾書のように黙した知識人は少なくない。例えば、やはり小説創作の筆を断った作家に沈從文がいる。彼は一九三〇年代に《蕭蕭》や《辺城》といった民族色・風土色の豊かな作品を発表し、現今でも愛読者の多い作家である。彼は文学が政治の道具となることへの反対姿勢を強く打ち出していたため、反動的な作家として批判されたのである。彼は建国後、古代服飾史・古代美術研究に専心し、小説を書く事はなかった。ここでは、沈從文と錢鍾書が同様の

心持ちでいたかどうかは問題ではない。彼ら中国の文学者が創作への興趣・意欲を失い、二度と創作しようと思わず、又結果として二度と創作することもなかったという事実が重いのである。

錢鍾書は文革後の中国において、高まりゆく名声の蔭で、黙しつゝ尚も思い続けていたのではないだろうか。「我々は文学を滅ぼし、文人を奨励すべきである——彼らに文人にならないよう、文学をしないように奨励するのだ。」と。

注

(1) 錢鍾書、字は默存、号は槐聚。一九一〇年十一月江蘇省無錫生まれ。清華大学外文系に入学。在学時は「三傑」とも「四才子」とも呼ばれるほどの秀才であった。大学卒業後、イギリス・フランスに留学。三八年に帰国した後は、母校清華大学・西南聯合大学・湖南省の国立師範学院・暨南大学の教授を歴任。建国後は清華大学外語系教授から中国社会科学院文学研究所の研究員になり、最終的には副院長を務める。著書には短篇集《人・獸・鬼》、散文集《写在人生边上》、長篇小説《围城》、詩文評《談藝錄》、古籍研究論著《管錐編》等がある。

(2) 《北京晚報》一九九八年十二月二十日には錢鍾書の訃報記事として、「『文化崑崙』と称えられた錢鍾書先生、北京にて安らかにこの世を去る。享年八十八歳。」とある。又、逝去の翌年には《文化崑崙・錢鍾書其人其文》（人民文学出版社 一九九九年七月）が刊行されている。

(3) 《北京晚報》一九九八年十二月二日は「錢鍾書先生歿度八十八華誕」として、錢鍾書の米寿を祝う記事を載せ、彼についての簡単な紹介として「（錢鍾書先生は）国家と民族のために卓越せる貢献をなし、何代もの学者を養成した、我々の国の貴重なる財産である。」と記した。

(4) 孔慶茂著《錢鍾書伝》（江蘇文芸出版社 一九九二年一月）、孔慶茂著《錢鍾書家族文化史・丹桂堂前》（長江文芸出版社 二〇〇〇年九月）、張文江著《营造巴比塔的智者・錢鍾書伝》（上海文芸出版社 一九九三年十二月）、李洪岩著《智者的心路歷程——錢鍾書的生平与學術》（河北教育出版社 一九九五年五月）、湯晏著《民国第一才子錢鍾書》（台灣時報文化出版企業股份有限公司 二〇〇一年十二月）等を参考にした。

(5) 趙瑞蕪著《離乱弦歌憶旧遊——從西南聯大到金色的晚秋》（文匯出版社 二〇〇〇年五月）に「一九三八年秋、錢鍾書先生はイギリスのオックスフォード大学を卒業し帰国したばかりで、聯大外文系の最も若い教授であった。」とある。

- (6) 一九三九年一月十五日「冷屋隨筆之一」〈論文人〉(《今日評論》週刊一卷三期)、二月五日「冷屋隨筆之二」〈釈文盲〉(《今日評論》週刊一卷六期)、四月二日「冷屋隨筆之三」〈一個偏見〉(《今日評論》週刊一卷十四期)、五月二十八日「冷屋隨筆之四」〈説笑〉(《今日評論》週刊一卷二十二期)。尚、「冷屋」とは西南聯大での錢鍾書の研究室の名であった。
- (7) 錢鍾書著《写在人生边上》(中国社会科学出版社 一九九〇年五月)。引用も当テキストに基づく。
- (8) この辺りの錢鍾書及び楊絳については、拙稿「錢鍾書の『猫』をめぐって——知識人としての自負自尊と自嘲自虐のはざま——」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第二十二号 二〇〇三年四月)に詳しい。
- (9) 錢鍾書著《围城》(人民文学出版社 一九八〇年十月)。「序」に「この本は丸々二年をかけて書いた。」という一文がある。
- (10) 同(9)前掲書
- (11) 同(9)前掲書の〈重印前記〉に「私は《围城》を書き終えた後、これにはあまり満足していなかった。今現在、私にとって更に満足が行かぬ出来である文学批評を出版した後、時間を作って再び長篇小説を書き、《百合心》と命名した。(中略)一九四九年夏、一家揃って上海から北京に居を移したのであるが、てんでこ舞いのうちに、見た所無駄紙のような一束の原稿をどこかに捨ててしまったのだ。」とある。
- (12) 同(9)前掲書。この引用は注(11)の直後につながるものである。尚、この〈重印前記〉の日付は「一九八〇年二月」となっている。
- (13) 創作色の濃さは、例えば〈魔鬼夜訪錢鍾書先生〉が魔物と錢鍾書の対話という形を採っていることなどから窺えよう。
- (14) 李洪岩著《智者的心路歷程——錢鍾書的生平与學術》(河北教育出版社 一九九五年五月)や張文江著《营造巴比塔的智者——錢鍾書傳》(上海文芸出版社 一九九三年十二月)等。
- (15) 孔慶茂著《錢鍾書家族文化史・丹桂堂前》(長江文芸出版社 二〇〇〇年九月)に、吳宓の日記に葉公超と陳福田が錢鍾書を招聘しないように清華大学の学長に進言したという記述があるとの指摘が見られる。吳宓・葉公超・陳福田はともに清華大学外文系の教授であった。尚、《吳宓日記》は刊行されているが未見。
- (16) 錢鍾書著《人・獸・鬼》(開明書店 民國三十五年六月)
- (17) 唐弢《四十年代中期的上海文学》(《文学評論》一九八二年第三期)
- (18) 李偉著《神秘的無名氏》上海書店出版社 一九九八年八月
- (19) 例えば胡河清は著書《真精神与旧途徑——錢鍾書的人文思想》(河北教育出版社 一九九五年五月)で〈靈感〉について「錢鍾書はここで同時代の作家達の独創的な生命体験に欠け、凡庸で生命力のないことを鋭く諷刺しているのである。」と述べている。
- (20) 《围城》を「新儒林外史」と称するのは既に定着した感があるが、最初にこのように称したのは無咎であると思われる。彼は〈読

《囲城》（一九四八年七月《小説》月刊第一卷第一期）において、「恋愛は正に新儒林外史の人物達の新課程である。」と述べている。

(21) 孫雄飛〈錢鍾書、楊絳談《囲城》改編〉（解璽璋主編《囲城内外——從小説到電視劇》世界知識出版社 一九九一年八月）

(22) 同(9)前掲書。以下、《囲城》の引用は全て同テキストに基づく。

(23) 楊絳〈記錢鍾書与《囲城》〉（《楊絳作品集》第二卷 中国社会科学出版社 一九九三年十月）に「唐曉芙は明らかに作者が偏愛している人物である。」とあるし、万書元著《第十位謬斯・中国現代諷刺小説論》（東南大学出版社 一九九八年十月）に「唐小姐を除いて、作者の諷刺の利刀による攻撃を逃れられた者は殆ど一人もいない。」とある。唐曉芙のみが錢鍾書の諷刺の対象から逃れていることは共通見解と言って良い。

(24) 夏志清原著・劉紹銘編訳《中国現代小説史》友聯出版社有限公司 一九七九年

(25) 荒井健『『結婚狂詩曲』あとがき』（錢鍾書作、荒井健・中島長文・中島みどり訳『結婚狂詩曲（囲城）』上巻 岩波文庫 一九八八年二月）